するわけではありません。ただ，私にとって「教養」とは，以上述べてきたように，今のところ，いわば二重の意味で存在しています。ですから，いささか欲張った考えですが，私は『ロミオとジュリエット』を「読む」ことを通じて，学生諸君にこの両方の「教養」を伝えたいと思っています。それがうまく伝わるかどうかは，もちろん，彼ら／彼女らの評価を待つほかないのですが…。

正解がない（かもしれない）問題を探求する

教育文化学部国際言語文化課程　教　授　立　花　希　一

2007年度に教養ゼミナールⅡが開設されてから，今年度で4回目になる。副題は「哲学／倫理学の諸問題」だが，この題は，私がテルアビブ大学に留学していたときに受講した恩師ヨセフ・アガシの授業科目「科学哲学の諸問題」の模倣である。大学院生も学部学生も社会人入学の学生も受講できる授業だったにもかかわらず，10名ほどの受講者しかいなかったが，やり方はいつも同じ。教室に入ってくると，アガシは「今日，議論する科学哲学の問題があるか？」と学生に尋ねる。学生が，具体的な問題を述べないと授業は始まらない。授業科目名に「科学哲学」が冠されてはいるが，科学哲学に限定した問題でなければならないというわけでもない。ポパーの提唱する反証主義における験証（corroboration）と帰納主義における確証（confirmation）との比較検討といった科学哲学固有のテクニカルな問題を議論することもあったし，ポパーの反証主義は懐疑論の一種なのかという問題を私自身が提起したこともあったが，マルクス主義理論は正しいかといった政治哲学上の問題を学生が提起し，それを議論することもあった。

シラバスの中の「授業の概要と進行予定及び進め方」に次のように記しているのは，このような知的体験があったからである。

哲学，倫理学の問題は与えられるものではなく，自らが見つけるものである。そうした問題を見つけようと主体的に努力する学生に対して，その手助けを行う。

しかしながら，私にはアガシのような度胸はない。私にはまったくお手上げのどんな問題が学生の間から飛び出してくるかわからないからである。そこで，開設以来毎年度，バートランド・ラッセルの『哲学入門』（高村夏輝訳，ちくま学芸文庫）を用いている。訳書では，「哲学入門」となっているが，原題は，*Problems of Philosophy*（哲学の諸問題）である。

ゼミでは，先ずラッセルの経歴紹介や『哲学入門』の目次紹介をした後，第1章の最初の文を読み上げる。最初の文とは，「理性的な人なら誰にも疑えない，それほど確実な知識などあるのだろうか」である。そして，学生に対して，第1章を読んできてくださいと言われたら何をしてくるだろうか？と必ず質問することにしている。するとかれらは，きまって「そこに何が書いてあるかを読んでまとめてくる」と答える。皆さんはどうだろうか？

おそらく，日本の教育の伝統では，本を読むという行為の目的は，正しい知識の習得であっ

て，そのためには，本の内容を正しく理解し，その本に書かれている正しい知識を覚えて身につけなければならないとみなされているのであろう。この典型的な例が，小・中・高等学校における教科書を用いた教科書から学ぶ教育である。

このような授業を小学校以来ずっと受けてきた学生が，「本に書かれている内容を理解し，その正しい知識を習得するためにまとめる」こと以外の読み方があることに気づかないのは当然なのかもしれない。

先に言及したように，ラッセルの著書の原題は，*Problems of Philosophy*（哲学の諸問題）である。問題は，普通，問い（疑問文）の形で述べることができるが，この本の第１章の書き出しが，ラッセルが看取した哲学の諸問題の中のまさに最初の問い，すなわち，「理性的な人なら誰にも疑えない，それほど確実な知識などあるのだろうか」という問い（問題）なのだ。

そこで私は，学生に対して，そのような「確実な知識」が存在するかどうかを自ら検討し，もし存在するとしたら，その具体例を提示し，どうしてそれが確実な知識と言えるのかの理由を考えること，あるいはもし存在しないとしたら，なぜ存在しないのかの理由を自分で考えることが先決ではないかと問題提起する。但し，皆さんにとって，この問いが興味深い問題でないとしたら，必ずしもこのゼミを受講する必要はないともいう。

さて，ラッセルの提起した最初の問いに対する回答として，学生たちは，必ず複数の競合する主張をしてくれる。理由はさておき，確実な知識があるという主張，確実な知識はない，あるいは，あるかないかわからないという主張である。どの主張が正しいのだろうか？

『哲学者列伝』を著したディオゲネス・ラエルティオス（生没年不詳，３世紀前半頃？）が，古代ギリシャの哲学者を独断論者と懐疑論者に分類したことからもわかるように，「確実な知識は存在するか」という認識論上の問題は，古代ギリシャ以来ずっと論じられてきた未解決の哲学的問題である。

ラッセルは，懐疑論に関するエッセイも書いているが，かれ自身は懐疑論者ではなく，少なくともこの『哲学入門』では，理性的な人なら誰にも疑えないという条件つきではあるが，確実な知識は存在するという（肯定的）独断論の立場である。しかしながら，この問題に対するラッセルの回答が正しいとは限らないことに注意すべきであろう（ポパーやアガシなら，ラッセルによる問題の定式化についてすら，真理の探究と確実性の探求とが両立しない場合があるという理由で，異議を唱えるであろう）。したがって，ラッセルの問題設定，回答，議論を鵜呑みにするのではなく，批判的に吟味・検討しようとする探求精神が求められるが，この批判的探求精神は，他の読書の場合にも不可欠であろう。

学生の回答に戻ろう。「確実な知識は存在しない」という懐疑論（あるいは否定的独断論）の主張に対しては，「確実な知識は存在しない」と主張する人は，確実な知識は存在しないという確実な知識をもっていることになりはしないだろうかと尋ねる。学生の反応はまちまちだが，もしそうだという（否定的）独断論の答えが返ってくれば，逆説的だが，確実な知識が存在することになるのではないかと尋ねる。他方，確実な知識が存在するか存在しないか，実はよくわからず，確実な知識は存在しないという知識は確実だとはいえないかもしれないという懐疑論の答えが返ってくれば，確実な知識は存在しないとは言い切れないので，そのような知識がどこかに存在するかもしれない。したがって，それを批判的に探求することは無意味ではないかもしれないと示唆する。

他方，これまでのゼミで，確実な知識の例と

して，毎年のように言及されるのが，「1＋1＝2」や「疑っている自分は存在する」等であるが，それ以外にもさまざまな具体例が述べられる。そこでゼミでは，具体的に言及された確実な知識の例をひとつひとつ検討していくことになる。

前者の1＋1＝2については，1＋1＝10というのは間違っているのだろうかと尋ねる（二進法の世界では1＋1＝10であり，そもそも2という文字は存在しない）。とすれば，1＋1＝2は十進法の世界で成立するのであって，無条件的・絶対的ではない（1＋1＝2のような可算の成立には，自然数の系列の存在が前提されている）。一般的に言って，どんな主張も何らかの条件，前提のうえに成立しているのではないかと示唆する。

後者の例は，高校の倫理で学んだデカルトの議論に基づくものであろう。デカルトは，徹底的な懐疑の末に，有名な「コギト・エルゴ・スム（我思う，ゆえに我あり）」を発見した。ここからは，独我論や他我認識の問題などが生じることなどを示唆する。問題がさらなる問題を次々と生み出していくことになる。

こうして，学生と私は，正解がない（かもしれない）問題の探求に足を踏み入れる。このような問題の探求では，学生の主体性・能動性，自律性，自由な発想・発言，協同作業，責任ある応答・議論，寛容といった精神・態度が要求されるし，こうした探求の過程において，それらの涵養が期待されるのだが，こうした精神・態度は，実は，学生よりも，教員である私に強く求められているものなのだ。

蛇足で恐縮だが，われわれの実生活が，正解がない（かもしれない）問題で満ち満ちていることは言わずもがなであろう（独身生活と結婚生活とでは，どちらの選択が正解なのか？）。

教養ゼミナールで伝えたいこと

教育文化学部人間環境課程　教　授　林　　信太郎

5年前から「教養ゼミナール－火山と災害について考える」を担当させていただいています。この授業は，1単位で前期前半に開講しています。受講生は工学資源学部が主力で，昨年はほとんどの学生が生命環境科学科，今年度は土木環境工学科でした。受講生の数は15－25人の間で，学生参加型授業としては適度な数かと思います。

実は，授業開始時点で，いつもこの3倍ほどの人数の学生がいます。冒頭の授業ガイダンスで「文部科学省の定めた学修時間45時間をフルに使うかあるいは少しオーバーする可能性もある」，「1単位授業であるが，3単位分は勉強できて効率が良い」などの説明をした上で，10分ほどの休憩時間を取ります。そうすると，強い覚悟を決めた学生だけが残り，しかも授業運営が可能な人数になります。とは言っても，授業ガイダンスで言ったことはでたらめではなく，実際の学修時間は，おそらく45時間をかなり越えていると思います。なかなかたいへんな授業だとは思いますが，はじめに予告してありますので，苦情は出ません。

さて，私としましては，教養ゼミナールの授業において「伝える」ことよりも様々な能力を自己開発して「身につける」ことを主眼においています。副題にあります「火山と災害」はそ